

岩手の風土記シリーズ（31）『戸（へ）の由来について考える』

岩手県から青森県東部のいわゆる旧南部藩領には、「戸（へ）」のつく地名があることは知っているかと思う。盛岡から国道4号線を北上して「一戸町」、「二戸市」、「三戸町」、「五戸町」、「六戸町」、「七戸町」、そこから東に向かって「八戸市」、そして少し南下して「九戸村」である。岩手県には一戸町、二戸市、九戸村が属することになる。そしてそれぞれの場所の名物というと、「一戸町」は御所野遺跡であろう。「二戸市」は金田一温泉とザシキワラシか、「三戸町」はサクランボがこれからの季節の物である。さらに北上して「五戸町」では「ごのへ三大肉」として馬肉、倉石牛、青森シャモロックが名物となっている、「六戸町」では大玉にんにく、「七戸町」では七戸短角牛ややまいも等が特産となっている。「八戸市」では、海産物が特に有名で、イカやサバが特にその名を響かせている。また夏の祭りである「八戸三社大祭」も八戸市民の粋を感じるものである。「九戸村」では、オドデ様、ほず袋、サルナシワインなどのサルナシの加工品が特産となっているようだ。このように「〇〇戸」とは何に由来するのか？「四戸」はどうなったのか？「一戸」の隣はなぜ「九戸」なの？等のミステリーをひも解いていこう。



【八戸三社大祭の山車】

【戸の由来】

まずは基本的な事柄をまとめてみる。岩手県と青森県にまたがる「一戸」から「九戸」までの地域をかつては「糠部地方（ぬかのぶちほう）」と呼ばれていた。「戸」の文字を含む地名は珍しくないし、「戸」に数字を冠した地名もたまに見られるが、「一」～「九」までが出そろったケースは全国でもここだけである。一体この整然とした連続地名は何を意味しているのだろうか。古来多くの人々がこのテーマに挑んできたが、その真相はいまだに明らかになっていないという、歴史ミステリーの一つである。そこで有力な説をいくつか紹介したい。

① 南部氏の「九牧」に由来するという説 中世に「糠部（ぬかのぶ）地方」に入部した

南部氏は馬産に力を注ぎ、「九牧」とよばれる牧場を設置した。まさに九か所で、当時南部領内固有のものであるから、「一戸」～「九戸」はこれらの牧場に由来するのではないかというのである。しかし、「一戸」～「九戸」は南部氏の糠部入部以前から既に存在した節があるようだ。さらには「九枚」の位置も、青森の大間が含まれていて、九つの「戸」と合致していない。従って、「九牧」説の可能性は低いと考えられる。

- ② 「貢馬（こうば）」の「幣（へ）」にかかるという説 「一戸」～「九戸」が古くから名馬の産地であったことは確かである。『へ』は『幣（ぬさ）神への貢ぎ物の意味』の意味で用いる場合がある。猿楽の小謡に「一の幣（へ）立て、・・・」というものがある、これは古代の駒牽き（馬を引いて連れてゆくこと）を詠んだものであろう。《一の幣立て》とは《一戸で育てる》という意味で、ここでの《立て》は産地を意味したものと考えるのが妥当であろう。古代の清原氏や奥州藤原氏の時代から糠部駿馬を都に献上する「貢馬」とのかかわりの可能性である。
- ③ 「貢馬置牧」制度、または「九ヶ部四門の制」にかかる広域行政区域として設定されたという説 現状では最も有力な説とみられている。十一世紀末の清原氏から十二世紀の奥州藤原氏の時代に設定されたようだ。「九ヶ部四門の制」は一の部（戸）から九の部（戸）までの各部にひとつの牧場と七つの村を置き、九ヶ部六十三村が協力して軍馬を育て、貢馬（献上馬）を納めるようにした制度である。また四門とは、一部（戸）～九部（戸）がほかの一国に匹敵するほど広かつたため、東西南北の四つの「門」に割り振ったものと解釈された。この「門」はゲートではなくエリアを示すとされ、「南門」に「一戸」と「二戸」、「西門」に「三戸」「四戸」「五戸」、「北門」に「六戸」「七戸」、「東門」に「八戸」「九戸」を振り分けたという説である。この九ヶ部四門の制の起源そのものは定かではないようだが、少なくとも鎌倉時代初期には存在していた事は明らからしい。すなわちそれ以前に糠部地方の「戸」地名が成立していて、これが中世の馬産地名や置牧制度整備に踏襲されたようだ。
- ④ 糠部開拓経営のためのエリア区分に由来するという説 大和朝廷勢力が、この地方一帯を開拓経営するための方策として、政治的目的をもって命名したという説である。坂上田村麻呂の後の征夷大将軍である文室綿麻呂（ぶんやのわたまろ）の頃との説が有力である。当時、この一帯はまだ「蝦夷（えみし）国」であった。すなわちこの地域一帯は、「権力の空白地域」であり、大和朝廷の治世が行きわたっていなかったの

である。そして広大で地形も複雑なこの地域全般を経営する観点から、簡便的に「一の地方（一戸）」、「二の地方（二戸）」といった区分をしたという説である。この説には史料的根拠はないが、ありえそうな説の一つである。

以上の様に、「戸」の由来についてはいろいろな説があり、そのどれもが興味深い話とつながっているようだ。現時点でも最も有力なのは③の「貢馬置牧」制度、または「九カ部四門の制」にかかる広域行政区域として設定されたという説である。いずれにしても馬を年貢として納めるための個別経営体として設置された「馬戸（うまへ）」の集落が「一戸」、「二戸」等に移行していったものようだ。

【「四戸」はどうなったか？】 正平21年（1366年）の日付がある、「四戸八幡宮神役帳（しんやくちょう）」には、「一戸」から「九戸」までの全ての地名が記載されている。すなわち「四戸」も存在していたことになる。かつて八戸市西部に位置していた「櫛引八幡宮（くしひきはちまんぐう）」は「四戸八幡宮」と呼ばれ、この地域を支配していた櫛引氏が「四戸殿」と呼ばれていた。そのため櫛引八幡宮周辺や旧福地村（現南部町）、旧南郷村（現八戸市）の一帯が「四戸」だったようだ。ではなぜ「四戸」が消えてしまったのだろうか？「四戸」の四（し）が「死」に通じて縁起が悪いためとの説もあるようだが、本当だろうか？かつて「四戸」を支配していた櫛引氏は、「九戸の乱」で滅亡してしまったようだ。これに伴い、「四戸」の領地も諸氏の所領として分割されてしまった。これにより「四戸」という地名も消滅してしまったと考えるのが有力である。しかし「四戸」という苗字は残っていて、現在も四戸さんという方多くいると聞く。

【なぜ「一戸」の隣が「九戸」なんだろう？】

地図を見ると「一戸」から始まり、北上して陸奥湾近くの「七戸」がある。なぜかそこからUターンして「八戸」「九戸」と続いている。そのため「一戸」と「九戸」が隣り合わせになっているように見える。なぜ？という疑問が湧いてくる。この謎を解くためには当時の交通事情を考慮しなければならない。「一戸」から「七戸」までは街道が通っていた。当時の奥州街道である（現在の国道4号線）。この街道沿いと沿岸地域とは険しい山並みに遮られていて、「八戸」へは「四戸」から分岐していかなければならなかった。また、「一戸」や「二戸」から「九戸」に行くには小倉岳や折爪岳を超えるはず、かなりの難所だったと考えられる。また、馬の産地を表す「戸立ち」という言葉があるが、「一戸立ち」から「七戸立ち」までは、「吾妻鑑」等の文献に記述があるが、「八戸立ち」や「九戸立ち」という言葉は出てきていないことから、まず「一戸」から「七戸」

までが最初に構築され、その後「八戸」、「九戸」が追加で建てられたためにこのような配置になったものと考えられたようだ。

このように、今回は地名にまつわるミステリーをひも解いてみた。東北にはまだまだ解明できない歴史ミステリーが数多く存在している事は言うまでもない。歴史好きの方には持ってこいの場所である。読者諸兄におかれても、独自の視点でこれらミステリーの謎解きの旅に出かけるのも一興かと思うがいかがであろうか。

参考資料

伊藤孝博著 無明舎出版 東北ふしぎ探訪 歴史・民俗のミステリーを歩く

二戸市観光協会 岩手のてっぺん ふしぎ発見